

科学としての経済学

池田, 国宏

<https://doi.org/10.15017/2999991>

出版情報 : 経済論究. 28, pp.1-13, 1972-06. 九州大学大学院経済学会
バージョン :
権利関係 :



科学としての経済学

池 田 国 宏

目 次

(一) 序 論

- (イ) 学問の目標について
- (ロ) K・マルクスの経済学の方法
- (ハ) 宇野弘蔵教授の経済学研究の方法論
—原理論・段階論・現状分析—
- (ニ) 理論と実践

(二) 本 論

- (イ) 『資本論』以前
- (ロ) 『資本論』
- (ハ) レーニン『帝国主義論』
- (ニ) 社会主義の初期
- (ホ) 『資本論』、『帝国主義論』, 日本資本主義分
析と実践との関係

(一) 序 論

(イ) 学問の目標について

今日、我々は、いかなる時代に生きていると考えるべきなのであろうか。このことは、一見、自明であるかのように見える。しかしながら、今日の我々の生きている時代ないしは世界を、自明のものとして見るか、あるいは、ある科学的究明を要するものとして見るかで、今日の思想的潮流は、ほぼ、二大潮流を形成しているものと見てよい。^(注1)

注1. 宇野弘蔵教授は、いわゆるマルクスの言う三位一体的定式が、「資本主義社会

の階級性が商品形態の内に包摂され、隠蔽されているという事実に頼った常識的規定にほかならず、「経済学は、この定式の矛盾混乱を摘発するだけでなく、この根拠をも明確にしうるものでなければならない。」(宇野弘蔵著、「経済原論」, 岩波全書, 224 ページ) と、述べられている。三位一体的定式にとらわれた見解と、それを脱却したより科学的な見解というふうに言いかえることもできるであろう。

例えば、ごく最近、ジャーナリスティックに使用されている言葉として、「激動の70年代」等を想起することができる。

しかしながら、この言葉は、よく注意してみると、保守、革新のどちら側からも、いろいろ複雑な意味を込めて使用されていることがわかる。

だから、我々が、いざ、いかなる時代に生きているかを、一義的に規定しようとすれば、種々の見解が氾濫するだけに、なかなか難かしい問題をはらんでいると考えてよかろう。

そこで、学問の目標というか目的というか、学問は、一体何のためにするのかと言えば、一応、多くの人々によって認められていることとしては、次のようなことがあるであろう。

すなわち、学問研究といっても、重商主義の研究者もいれば、封建時代のことを研究している人もいれば、又、ケインズ経済学を研究している人々もいる。

これは、経済学の分野だけでなく、政治・法律学等の諸分野においても、過去から現代までにわたる、いろいろな諸研究が行われているわけであるが、これらの諸研究は、究極的には、我々が、いかなる時代に生きているかを、より明確に規定するためといってよいであろう。

専門分野に一応頭をつっこめば、なかなか一生かかっても、そこでの諸問題の解決は出来にくいというところはあるわけであるが、やはり、そういう専門分野に分かれての研究も、究極的には、現代社会を理解する、そういうことに役立てるためにあると考えてよいであろう。

注2. 過去から現代までにわたる、とは言っても、「経済学の研究は、商品経済を対象

として行なわれ、商品経済が一社会の支配的原理として確立された資本家的商品経済の出現とともに始めて独立の学問として発達することになった。」(宇野弘蔵著、「経済学方法論」, 東京大学出版会, 3 ページ) わけであり、政治学、法律学等も同様だと考えてよい。

(ロ) K・マルクスの経済学の方法

K・マルクスは、19世紀中葉の資本主義の全盛期に生きた人であるが、彼の経済学研究すなわち学問研究の目標としては、「経済学批判序説」, (三)経済学の方法、という項目のなかにある有名な箇所^①で、次のように述べている。即なわち、17世紀の経済学者たちは、「全体の混沌とした表象としての人口」からまず分析を始め、それからさらに下向して、諸階級、資本、賃労働、さらには、貨幣、価値、価格という、ブルジョア社会を構成するもっとも抽象的なカテゴリーにまで到達した。これまでの経済学は、こういう道をたどったのであるが、新しいマルクスの経済学は、まず『資本論』の体系を見てもわかるように、商品に始まり、諸階級に終わる、つまり、もっとも抽象的なカテゴリーから、より具体的なカテゴリーにまでよじのぼり、諸階級ならびに、「多くの規定と関連をもつ豊富な総体としての人口」^②というような、そういう現実^③に到達するという、そういう仕方^④で経済学の研究・学問の研究がなされるようになってきた、というのである。これが、まさに、K・マルクスの経済学研究の方法であった。

(ハ) 宇野弘蔵教授の経済学研究の方法論

——原理論・段階論・現状分析——

しかしながら、K・マルクスの時代から、即なわち、資本主義の最も典型的に発展した自由主義の全盛期から、資本主義の衰退期としての帝国主義段階へと、歴史の様相が変化し、さらにその後、資本主義世界の内部では、いわゆる国家独占資本主義といわれるそういう時代にまで歴史は展開せられてきている^(注3)わけで、こういう歴史の進展・変化とともに、経済学研究の方法は、当然変化してこねばならない。

注3. 歴史の様相が変化する、といっても、資本主義が資本主義として存在するかぎり、経済学も資本主義を対象とするわけであるが、しかしながら、資本主義社会は、その内部で多少の変容を遂げてきている。それを、宇野教授は、段階論の問題として取り扱っている。いわゆる、商人資本、産業資本、金融資本、という資本規定の変質をとまなう資本主義の体質の変化である。だから、資本主義社会は、宇野教授の言う経済原則が経済法則に包まれて運動していることは、動かし難い事実であるが、この木の幹を基軸として、枝葉に、重商主義、自由主義、帝国主義という色合いの変化があったものと考えてよいのであろう。

いわゆる有名な修正主義論争というものがあるけれども、即なわち、あの当時の帝国主義段階に特有な諸現象を、どういう風に理解したら良いか、そういうことが問題にされたわけであるけれども、宇野教授の提唱せられた、いわゆる経済学研究に際しての三段階論は、それに一応の解決を与えた。これは、マルクスの経済学方法論の発展・変化せしめられたものとして考えてよいのであろう。周知のように、宇野教授の三段階論というのは、いわゆる、『原理論』、『段階論』、『現状分析』という風に、経済学研究に際しては、その研究方法を三段階に分けて問題にするのが、帝国主義段階ならびにその後の新たな時代の諸現象を把握する場合に、より適切であるとする議論である。

(二) 理論と実践

しかしながら、『帝国主義論』の著者であるレーニンの指導になる1917年のロシア社会主義革命は、世界史に新たな一ページを開いた。^(注4) 経済学研究もさることながら、実践が、大きな問題となってきたのである。

注4. 「…中国のブルジョア民主主義革命には、1914年の第一次帝国主義世界大戦の勃発と1917年のロシア10月革命で、地球の6分1を占める地域に社会主義国家がうちたてられた後、変化が生じた。それ以前には、中国のブルジョア民主主義革命は、旧いブルジョア民主主義の世界革命の範疇に属し、旧いブルジョア民主主義の世界革命の一部分であった。それ以後は、中国のブルジョア民主主義革命は、新しいブルジョア民主主義革命の範疇に属するものにかわり、革命の陣営から言えばプロレタリア社会主義の世界革命の一部分となった。なぜか？それは、第一次帝国主義世界大戦と最初に勝利した社会主義10月革命が、全世界の歴史の方向をかえ、全世界の新しい歴史的時代を画したからである。」(毛沢東

『新民主主義論』、毛沢東選集刊行委員会訳、18ページ）というのは、毛沢東の有名な言辭である。

それで、理論と実践の問題をどのように考えたら良いのか。いわゆる、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン、毛沢東という、特に最近では、毛沢東思想として話題を呼んでいるわけであるが、そういう問題を少こし検討してみたい。

以上が、この論文の骨組みである。

(二) 本 論

(イ) 『資本論』以前

経済学の生成・発展は、いうまでもなく（前掲注2参照）資本主義の生成・発展と歩調を合わせている。ウィリアム・ペティ『租税貢納論』、1662年、を始祖とし、アダム・スミス、『国富論』、1776年、デビッド・リカード、『経済学及び課税の原理』、1817年、をその大成者とする、マルクスの言う「古典学派」がそれである。周知のように、この「古典学派」は、その生成の過程では、いわゆる重商主義批判という形での、産業資本家階級のイデオロギー的産物であったとはいえ、多少とも自己のよって立つ物質的基礎を科学的に解明しようとするものであった。

しかしながら、スミス、リカード以後、この「古典学派」は解体の方向へ、いわゆる「俗流化」の道をたどることになった。科学的ブルジョア経済学の弔鐘が鳴ったわけである。
(註1)

注1. K・マルクス『資本論』の第一巻の二版後記で述べられているように、「ブルジョア階級は、フランスとイギリスでは政治権力を獲得してしまった。そのときから、階級斗争は、実際的にも理論的にも、ますます露骨で陰悪な形をとってきた。」そこで、科学的な態度が放棄されるようになってきたとのことである。

このような流れと並行して現われたのが、K・マルクス『資本論』であっ

た。これは、非常に画期的であった。この当時、労働者階級の指導の下に、パリ・コンミューンというものがあったらしいが、これが新しい時代を画したとすれば、『資本論』は、これに対応する理論的成果であったと考えてよいであろう。
(注2)

注2. 宇野教授は、「マルクス程に歴史に徹しない吾々にとっては『資本論』は汲めどもつきない泉といってよいでしょう。書いてあるものを理解するといっても僕たちの注意は、僕たちの国と時代とによって制約されているために、こういう偉大なる書物では、次々に新しい意味を発見することになるのです。」と述べられているが、まったく納得できうることである。

そして、前述の「古典学派」の解体・俗流化の流れを汲むものとして、これは既に、資本主義の新しい段階としての帝国主義段階へ移行する時期と考えた方がよいのかも知れないが、いわゆる「近代経済学」の系譜が始まった。この経済学は、その後のケインズ経済学や「成長の経済学」、「現代経済学」等々へ流れると考えてよい。

又、『資本論』の方は、修正主義論争を経ながらも、レーニン、スターリン、毛沢東へ連らなって行くと考えてよいのであろう。

つまり、少くとも『資本論』の成立以後、経済学は、宿命的にブルジョア的とプロレタリア的との二大潮流を宿し、又、経済学だけに限らず、人間活動の種々の分野で、常に大きくわけて、この二潮流が存在していたということが推測できる。

(ロ)『資本論』

単に推測できるというだけでなく、これを科学的に基礎づけているのは、現代社会を解明する際のいっさいの出発点としての、K・マルクス『資本論』である。このK・マルクス『資本論』は、ブルジョア社会の最も基礎的な範疇としての商品から始まるわけであるが、これは必然的に貨幣に発展し、さらにこれが資本の諸形式を生みだし、これらの流通諸形式が、労働力をも商品化することによって、一社会の労働生産過程を把握し、資本家階級と労働者階級との

階級対立をはらむ、いわゆる「ブルジョア社会」を形成することになったのである。いうまでもなく、これらの商品・貨幣・資本というような諸カテゴリーは、人間関係の物的現象形態なのである。

資本の生産過程では、剰余価値が生産され、それを起動的動機として、資本家的生産方法は発展し、過去の歴史には見られなかった程の生産力の発展を見るのである。しかしながら、もともと流通形態であった資本は、生産過程を把握して後も、依然として生産過程と流通过程との統一としてあるわけで、資本の流通过程も、資本の運動の不可欠の一環として現象する。そして、この資本の運動の繰返えしは、資本の再生産過程に発展する。もっとも、物的再生産過程は、その基礎条件として、労働力商品の再生産が行なわれるということがなくてはならない。このような資本の再生産過程の円滑な進行は、当然そこで形成せられる所得の特有なる分配様式を生みだす。資本には利子が、土地には地代が、又労働には賃銀が支払われるという「ブルジョア社会」の三位一体的定式は、資本家的商品経済の物神的性格が、最も高度に展開された、究極の姿である。この三位一体的定式の下に、資本家的商品経済の階級社会としての性格は隠蔽され、自由・平等な関係によって取り結ばれた、いわゆる「市民社会」として現象するのである。

(ハ) レーニン『帝国主義論』

このような、K・マルクス『資本論』による「ブルジョア社会」の運動法則の理論的解明は、19世紀後半以後の資本主義社会の新らたな発展段階としての帝国主義段階の出現とともに、新らたなる理論的補足解明の必要にせまられることになってきた。これらの帝国主義的な諸現象の理論的解明は、R・ヒルファディング著『金融資本論』、レーニン著『帝国主義論』で代表させることができる。レーニンは、『帝国主義論』の序言の中で、「この小冊子が、現在の戦争と現在の政治を評価する上で、それを研究しておかなければならぬものをも理解できない基本的経済問題、すなわち帝国主義の経済的本質にかんする問題

を解明する一助となることを期待したい。」と述べている。
(注3)

注3. レーニン³は、フランス語版およびドイツ語版への序言の中で次のようにも言っている。「本書の基本的任務は、すべての国の争う余地のないブルジョア統計の総括的資料とブルジョア学者たちの告白とにもとづいて、世界資本主義経済の総括の様相が、20世紀の初頭に、すなわち最初の世界帝国主義戦争の前夜に、その国際的相互関係においてどのようなものであったかをしめすことであったし、いまなおそうであるからである。」(『帝国主義論』、岩波文庫版、15ページ)と。

まず、工業の部面において、生産の集積・集中が行なわれ、前時代とは大きく区別されるいわゆる独占化の傾向が、現われる。又、銀行業の部面においても、これと同じようなことが進行する。
(注4)

注4. 「ドイツを支配しているのはたかだか300人の巨大資本家であって、しかもその数はたえず減少しつつある。銀行は、あらゆるばあい⁴に、あらゆる資本主義国で、銀行立法のあらゆる相違にもかかわらず、資本の集積と独占の形成との過程を幾倍もつよめ、また促進する。」(『帝国主義論』、61ページ)

これを、R・ヒルファースディングは、『金融資本論』の中で、「金融資本」という名のもとで総括している。しかも、株式資本形態を基礎とする有価証券等の演ずる役割は、偉大なものである。これは、対外的には、資本の輸出という現象をとるわけであるが、この現象の必然的根拠は、レーニンによれば、「少数の国々では、資本主義が『爛熟し』、資本にとっては(農業の未発達と大衆の貧困という条件のもとで)『有利な』投下の場所がないということによって、創くりだされる。」(103ページ)と述べている。そして、このような資本の輸出は、必然的に各国の資本家団体のあいだでの利害の対立を生み、世界の直接的な分割という現象を呈することになる。

しかも、資本家団体のあいだでの利害の対立は、不断の変化の中にあり、二、三の列強のあいだでは、経済的、政治的に特に激烈な摩擦を生みだす。このような摩擦は、必然的に政治の延長としての帝国主義戦争に結果せざるを得ない。まさに、レーニンの『帝国主義論』は、「世界資本主義経済の総括的様

相が、20世紀の初頭に、すなわち最初の世界帝国主義戦争の前夜に、その国際的相互関係においてどのようなものであったか」を見事に描写しているわけであるが、当時の時代の諸相を理解するには、なくてはならない理論的武器としてあるわけである。

(二) 社会主義の初期

又、レーニンは、1920年7月に、『帝国主義論』の中の「フランス語版及びドイツ語版への序言」の最後の箇所で、「帝国主義はプロレタリア革命の前夜であり、このことは、1917年以来、世界的規模で実証されたところである。」と述べられているのであるが、まさに彼の指導の下に、1917年に世界史に初めて、社会主義国が誕生し、資本主義の最高の発展段階としての帝国主義の時代の一角が崩れ、まさに社会主義の初期の時代が切り開かれたのである。^(注5)

注5. 宇野弘蔵著『経済政策論』の改訂版において、従来、断定をさしひかえておられた第一次世界大戦以後の時期を、社会主義の初期として規定されておられるようである。

そして、この新しい時代の息吹きは、第2次世界大戦後、多くの社会主義国の成立、なかんずく、中華人民共和国の成立によって大きく引き継がれた。1949年のことである。^(注6)

注6. なかんずく、ソ連共産党（この国は、社会主義祖国であるが）の修正主義化と共に、共産党の偉大な任務は、中国共産党、アルバニア共産党によって担われることとなった。中ソ論争として有名である。

(ホ) 『資本論』、『帝国主義論』、日本資本主義分析と実践との関係。

今日、我々は、既に1970年代に生きているわけであるが、K・マルクス『資本論』、N・レーニン『帝国主義論』ならびに日本資本主義分析と実践との関連、即ちマルクス主義哲学で言ういわゆる「理論と実践」の問題について考

えることは、是非とも必要である。

このような「理論と実践」の問題については、宇野弘蔵教授が主に『資本論』と社会主義、「マルクス経済学の諸問題」等において、一応考えておられる。

宇野教授によれば、「理論と実践」の問題を考える場合、マルクスによって展開された社会科学を基準とすべきである、と主張されているもののようである。

我々が、今日、資本家的商品経済の中で生活している以上、いわゆる宇野教授の言われる「原理論」、ならびに「段階論」の諸規定を基礎とすることなしには、今日のいかなる諸現象をも理解する上で、ほとんど不可能であることは、大いに是認しなければならない。

又、宇野教授によれば、「マルクス主義における理論に対する実践という場合の実践を、政治的な組織的活動と理解している。」と述べられ、我々の日常生活乃至職業的活動とを区別している。そして、理論と実践との統一ということの意味を、宇野教授は、理論が実践活動の基準として役立つことだと理解されている。また、理論と実践という場合、どちらに重点があるかと言えばやはり、重点は後者にあり、後者すなわち実践によってその基準として利用されることだ、と述べられている。

そして、『資本論』のような原理論はもちろんのこと、段階論としての『帝国主義論』にしても、さらにはまた日本資本主義論のような現状分析にしても、理論であれば、多かれ少なかれ抽象的規定とならざるを得ず、実践的活動のような具体性を全面的には把握できないとしている。

政治的組織活動＝実践活動の具体性とはどのようなことかといえ、次のようなことを上げている。つまり、実際上自分の味方になる者の数や、組織力、又相手方の力等が問題となり、さらに、これをどういう手段・方法で組織し、現にその組織がどうなっているか、どういう要求をもってどういう方向に動きつつあるか、それをどういう方向に動かさなければならないか等々が問題となってくる、というのである。（『資本論』と社会主義）

そして、宇野教授自身は、実践的立場から『資本論』を研究するのでなく、単に科学としての経済学の完成にこれを求めたのだと言って、一応実践へは飛び込まないとして、自己のやり得る範囲を意識的に限定されている。宇野教授の経済学研究に於いての偉大なる貢献を見れば、我々は、教授に頭がさがっても、ブルジョア的などといって批難することは、とうていできない。

大体、以上が、私のつかんだ、宇野教授の理論と実践に関する理論的表明のアウトラインである。私も、大略、宇野教授の主張を承認せざるを得ないのであるが、若干、宇野教授の諸説に対する疑問を呈してみよう。

次のように述べられている箇所がある。「前にも述べましたように、レーンのように偉大なる実践家は、マルクス主義の理論と実践とから弁証法的方法をも体得しているといつてよいのかも知れません。そしてそれによって運動の種々なる局面で新たな展開を提起することができたのだと思います。しかし、学問としての哲学ということになると、そういう偉大なる実践家によって体得されているというだけでなく、吾々にも理解しうるような形で展開されなければなりません。そしてそれは経済学の原理の体系化ということを出発としなければならない——としか考えられないのです。先年来我が国で翻訳もされ、研究もされた毛沢東の『矛盾論』や『実践論』などは、その点ではどうも逆の方向にあるようにしか考えられません。あらゆる自然現象や社会的諸現象の対立を直ちに弁証法の問題として片付けようとすることは、かえって弁証法的矛盾を不明確にするだけに終わるのではないかと思うわけです。少なくともそういうやり方は科学的ではないと考えるのです。マルクス主義哲学もそういうやり方であつてよいものでしょうか。」というのである。

だから、宇野教授の主張点は、「あらゆる自然現象や社会的諸現象の対立を直ちに弁証法の問題として片付けようとすることは、かえって弁証法的矛盾を不明確にし、」「少なくともそういうやり方は科学的ではない」というのであるが、この点を、我々は、いかに考えたら良いのであろうか。

そこで、資本主義社会と社会主義社会という二つの社会を想定してみよう。

資本主義社会とは、いうまでもなく、経済原則が、商品形態を通して商品経済の法則として行われている社会であり、社会主義社会とは、商品経済の法則が廃棄されて経済原則があらわになり、一定の目的に対して計画的に処理することができるという関係にある社会であると考えてよい。

資本主義社会の諸現象は、経済原則が商品形態を通して行われているため、一見、複雑な様相を呈し、それは、経済学研究を基礎として、法律学的、政治学的、さらには哲学的分野にまでおよぶ広汎な科学研究を必要とする。そこに、我々が、現在学問研究をやりうる根拠があると考えてよいのであるが、さて、社会主義社会においては、これらのことを如何に考えたら良いのであろうか。一応、経済法則は基本的には廃棄されているわけであるから、経済原則の世界がそのまま現われるわけである。従って、社会主義社会における学問の対象というか、これは、資本主義社会でやってきた学問研究の対象と随分違ったものにならざるを得ない。勿論、これまでやってきた資本家的商品経済を対象とした経済学をはじめとする社会諸科学の体系が、即座に全く不用になるというのではないが、おそらく消滅の運命をたどらざるを得ない。だから、社会主義社会の内部における理論と実践との関係の問題と、資本主義社会の内部における理論と実践との関係の問題は、随分異った意味をもたざるを得ない。

肢体の不自由な人には、杖が必要であるが、資本家的商品経済という、一見不可解な現象を呈する社会に生活する人々には、杖として、『資本論』や『帝国主義論』その他の諸社会科学を必要とする。このような羅針盤があって、はじめて社会の荒波をも無事に乗り越え、未来をも見通すことが出来るという関係にあるのではなからうか。

そこで、資本主義社会の内部にあつては、宇野教授も強調されているように、即座に、「理論と実践との弁証法的統一」とか、「理論の基礎は、実践であり、理論はまた転じて実践に奉仕するものである」（毛沢東、『実践論』、国民文庫版、11ページ）などとは言えない一面も確かに出てくると思う。

しかしながら、社会主義的な諸関係の内部にあつては、経済法則が支配して

いるわけでもないので、社会的な人間諸関係も、（いわゆる理論と実践との関係としても）案外ストレートに、即なわち、弁証法的に捉ええられることになるのではないであろうか。だから、宇野教授の使用されている「科学的」^(注7)という言葉の意味とは別の意味で科学的に（原則的の道理に合わせて）毛沢東などはやっているのではないでしょうか。

注7. 宇野教授の使用されている「科学的」という言葉の意味は、「資本主義社会に関する真に納得のゆく理論を把握し、これによって出来れば吾々の住んでいる国の資本主義の経済学的分析をやりたいのです。」（宇野著『『資本論』と社会主義』、57ページ）と言っていることからわかるように、経済学の科学化、さらには社会科学全体の科学化を目指すという意味での科学化と考えてよいのであろう。例の『資本論』の副題である「経済学批判」の立場といってよいであろう。ただ、その科学の対象とするところは、あくまで資本主義社会の諸現象であることに注意を促ながさう。毛沢東の弁証法は、資本主義社会が一応止揚された世界で、自然現象や社会現象に適用されているのである。